

## 茅葺き\_2

2012年8月27日～9月  
1日、9月19日～21日

未完の屋根の茅葺きを  
進めるのはわれわれだけ  
では無理なので、職人の  
指導を仰げる夏休みに集  
中的に取り組むことにし  
た。傷んだ葺き替えの部分  
の葺き替えも合わせて行  
う。

指導下さったのは、前回  
同様、斎藤親方から紹  
介いただいた畑中屋根  
工事（滋賀県野洲市）の  
吉田顕さんご夫妻と、大  
原野の土橋道一さんの三  
人。

作業の開始に先立って、  
われわれでできる準備作  
業として、小屋組の横木  
（小舞竹）を「編み下がり」  
で取り付けることを行っ  
た。

また西山で刈り集めた茅  
をそろえて束にし、「軒づ  
け」に必要な良質の短い  
茅を斎藤親方の倉庫から  
運んだ。

8月27日朝9時、茅葺  
き職人の吉田夫妻到着。  
これから1週間で屋根を  
葺く。

まず足場を組むことから  
始める。

足場丸太も斎藤親方から  
貸していただいた。



2012/8/22

茅を葺く部分。茅束を取り付けるための横木（小舞竹）を編み下がりて組んだ。



2012/8/22

西山で刈り集めた茅の整えと束ね直し



2012/8/23

斎藤親方からいただいた古茅。古い茅も再利用できる。



2012/8/27

番線とシノの使い方を習う。足場を組める美大生誕生。



2012/8/27

筋交いを入れて頑丈に。単管より丸太に番線。



2012/8/27

足場は軒の高さに合わせる。茅の置き場にもなる。



2012/8/28

2日目の朝、療養中の斎藤親方が見に来られた。

1\_作業は、屋根の軒部分に茅を編み付ける「軒づけ」から始める。以前の茅葺きとのつなぎ部分に萱束をつける吉田顕師匠。



2\_軒づけを進める。軒付けは見映えと水切りを決める部分なので、整った短めの茅束を使う。



3\_縫い竹で茅束を小舞竹に縫い付ける。縫い竹は挿したり抜いたりするので、丈夫ですべりやすい細目の白竹を使う。使っているのは、吉田さんがその場で手づくりしたもの。

4\_奥さんと息の合った縫い付け作業。



5\_滑らかな斜面になるよう、ガンギで茅先を叩いて整える。

6\_小舞竹を足でしっかり抑えながら、縫い付けを丁寧に繰り返す。



足場丸太は、野地竹に通したワラ縄の両端を茅の段の下あたりまでおろして、男結び(写真上)でとめていく。丸太の間隔は茅の長さに応じて均等にす。





布屋根とのつなぎ部分は、茅束の向きを変えて断面(ケラバ)をこちらに向けるなど、高度な職人技術を要するので、吉田顕師匠が一人コツコツ作業する。

布屋根に茅葺きが重なるが、布屋根の縁につけた銅板が水切になる。



茅葺きでもっとも美しいのが、茅束の株がそろってつくる断面「ケラバ」。

以前に葺いたケラバの段差は30センチ近くあり、この段差をならす作業を吉田顕師匠が見せて下さる。

上の茅束の一番下の層を引き出し、葺き上げた下の茅束の上端に重ねる。次にその上に下の茅束の先を重ね、また上の茅束から引き出して重ねる。

これを繰り返して交互に茅を重ねていくことで、段差をなじませていくのだ。



茅の下に竹を差し込んで持ち上げ、新しい茅を下から差し込む「差し茅」。



捨て茅、差し茅、引き茅を組み合わせることで段差がなくなった。



段差はすっかり見えなくなった。



1\_ 続けて北側・東側の屋根の修復に取り組む。ワラを葺いた部分は凹んで草が生え、傷みが激しい。

2\_ ワラ葺きの部分を全部取り除く。



3\_ ワラ束をござり取り除いた東側の屋根。

4\_ 茅束を付ける前に小舞竹(横木)を加える。

### 差し茅の仕方



短めの茅束の先を折り曲げる。先が強くなり、かつ抜けにくくなるからだ。



折り曲げた先から茅の間に差しこむ。



手のひらで押して束全体をしっかりと差し込む。あとはガンギで面を調える。



茅を葺き直す前に小舞竹を付け加える。

2012/8/30

捨て茅・引き茅・差し茅をほどこし、ガンギでならした茅葺きのふんわりした斜面は、シルエットも美しく、寝そべれば至福の居心地。

1\_吉田 顕師匠によって美しく仕上げられたケラバ (2012/9/19)。



2\_ガングで屋根の斜面の凹凸をならしていく。



3\_中国・内モンゴルからの留学生サンナ(珊娜)が最後の化粧仕上げで鍬を入れる。



\*9月4~9日、彼女の故郷の内モンゴルに研修旅行に行く (p.102-105)

4\_『京都リビング新聞』の取材を受ける (2012/9/20)。記事は2012年10月6日号に出る。



足場も取り、軒先のヒゲ(はみ出た茅の先)を刈り込む。茅葺きとワラ部分の補修は翌9月21日に完了した。

## 「つちのいえ」と 水に沈んだ家につ いて交差すること

川端あす香

2011年より活動に参加  
2015年3月 大学院日本画専攻  
攻修了  
2016年3月 個展「私たちは永遠に繰り返す、束の間の夢を見る」シャンティすぽっとギャラリー  
2019年9月 「いい芽ふくら芽2019」八犬堂ギャラリー賞受賞、松坂屋名古屋店  
2020年1月 個展「素と装い」丸山雄進堂筆屋ギャラリー  
その他グループ展等に参加

「つちのいえ」の活動について振り返ると、同時期に経験した水害のことが頭に浮かびます。身の回りの素材を生かし、古い知恵を学びながら創造する「つちのいえ」と浸水した実家の後始末は別方向にありますが、日常が剥がれた時に見える物質の存在感について考えが交差します。

「つちのいえ」では解体される民家の土壁をハンマーで砕いて再利用したり、屋根に使う植物を鎌で刈って集めたりと、自分達で材料を調達します。硬く乾いた古い土は藁や砂、水を混ぜれば再び壁になり、野生のチガヤは職人の手で規則正しい萱葺きの屋根になります。単純な素材が人の手で美しく変換される瞬間を見ることが出来ました。「つちのいえ」でお茶を飲み、人が集うと温かな空気が流れますが、一人で訪れる「つちのいえ」は生き物の様な気配がありました。物質としての存在感と家や道具としての日常性が常に揺らぎながら両立することの面白さと、それらを上手く繋ぐ知恵の仕事を体感しました。

一方、浸水した実家では生活の中で気配を消していた道具類が、泥にまみれた非日常として迫ってきました。水害で自分も周りも衝撃を受けていましたが、家の後始末には不思議と労働の明るさがあり、泥をかき出し汚れをはらっていくと、最後には家の構造がはっきりした輪郭で浮かび上がってきました。生活に紛れている物質がある瞬間、美しく浮かび上がったり、復讐がごとく異様に迫ってくる瞬間には非日常的な感動があります。出来れば美しく共存したいですが、まずは日常の表面下にある存在に自覚的でありたいですし、またそれらを生かす知恵について「つちのいえ」は非常に実践的な場であると改めて思います。



浸水した実家の後始末 (2011年9月紀伊半島大水害)



つちのいえの中から撮影した作業中の萱葺き屋根

## ざらっと残って いること

佃 七緒

2011年度テーマ演習参加  
2015年大学院陶磁器専攻修了

近年の活動に、  
2018年「Artspace」(シドニー)で滞在制作(京都芸術センターエクスチェンジプログラム)

2019年飛鳥アートヴィレッジ参加  
2020年 個展「石積みの家との18+9通信」ギャラリー佑英(大阪)  
2021年1-3月 ALLNIGHT HAPS 2020「翻訳するディス

つちのいえと井上先生について、今の私にすり込まれていることを雑多に書きます。

「土は再生可能で、土で作る家はプロでなくても誰でも、やり方さえ分かれば直せる」

井上先生のこの一言には、「何度でも素材に戻して組み立て直すことができる」「よく見たら理解できる構造をしている」「誰でもやればできる特殊でない技術と道具」という要素が含まれています。どんな人にとっても「見て・考えて・作る」機会を開くこと、私が視覚芸術に携わることを楽しむならこれだわ、とまるっとそのまま現在の私の制作のやり方を決める要素として、取り込んでいると思います。

「ニッチ」

つちのいえであちこちにできていったニッチには、私がいま美術を見るときに楽しんでいることが詰め込まれています。

「そこに何故だか壁の厚みの分の凹みがある」という状態は、これから何かを組み合わせ置く(活動する)ことを人に誘発し、そこに目線が行くよう誘導し、それでいて「壁である」という住む人を含めたその環境全体との関わりを示していて、ああ、そういうのしたかったんだよな、という私の制作意欲の一つになっています。

タンシグ」HAPS1 階ギャラ  
リー、京都（企画者として参加）

<https://nanaotsukuda.com/>

もう長い間、どこの国に行っても追いかけており、日本の木造軸組の家では作りにくい構  
造だからこそ、憧れのように駆り立てられて外にでかける口実にもなっている気がします。



ペルーのアマゾン雨林の村サン・ロケ・デ・クンパサでの土壁づくり。草を混ぜ込んだ土を振り回して一定量の塊を作り、それを壁の基材の両側から挟み込んで押さえる。2016年、佃七緒撮影。

## 生きることを、 みんなで、つくる

藤村香菜子

2012年から参加  
2014年工芸科染織専攻卒業

主な受賞：  
2018年 第5回地域の起業家  
大賞  
2020年 第8回京都市女性起業  
家（アントレプレナー）賞

著書：  
『元シティーガールの田舎で  
移住・起業奮闘記—自分にも  
社会にもやさしい働き方—』  
2021年

京都市立芸術大学での学びの、大きな特徴の一つに、専攻分野の垣根が低いことがあ  
ります。受験科目から共通の内容で、一回生の時は専攻ごちゃ混ぜで課題に取り組み、専  
門分野に分かれた以降も取り組める選択制の授業として「つちのいえ」がありました。

私はその中で、「生きることを外注しすぎない」と「専門分野を超えて力をあわせる」  
ことの面白さを学びました。

今や、暮らしの中で様々な便利なサービスが出てきていて、暮らしの全般をほぼ外注でき  
ると言っても過言ではないでしょう。しかし「つちのいえ」では、土地を整備し、土を採取し、  
屋根を葺き替え…ものの成り立ちがわかり、身体を動かし、自分の暮らしを作っていく魅力  
を知ることができました。便利なサービスに「使われる消費者」になりがちですが、「使いこ  
なしていく生産者」になっていく方が面白いと思います。

そして昨今、世の中で求められる仕事の専門性が上がっているように感じます。仕事の始  
めから終わりまでを1人で完結させるよりも、分野を超えて力を合わせる必要性が高まって  
います。しかし、何を自分の専門とし、何を他人に頼んだら良いのか、またどういった配慮  
をして頼むべきなのか、心得ておく必要が出てきます。これも「つちのいえ」で、技術を持  
つ人のすごさを体感として知ることができたことや、他分野を極めようとしている仲間と共に  
取り組めた事が、今の力になっています。

私は元々、アーティストになるのではなく、広め手として活動するスキルを身につけたいと  
思い、京都市芸大に入りました。今は、工芸作家など、暮らしにまつわる技を持っている人  
のプラットフォームを作り、人材紹介・商品開発・小売・webやチラシや冊子やなど広報物  
の作成や各種SNSの運用・クラウドファンディング等で資金や仲間集めからサポートするな  
どの事業を行なっています。（一般社団法人わぎどころPON <https://wazappon.link>）

一人一人が持っている力を、日々の暮らしの中で、より発揮できる世の中に。

つちのいえで学んだ大切なことを、これからも生かしていきたいです。

左：暮らしにまつわる技を持っ  
ている人のプラットフォーム  
「わぎどころPON」（南丹市）  
右：卒業制作として取り組んだ、  
縦横とも古着で四方耳で織れ  
る織り機。特許をとって製品化。

